

成績評価ガイドライン

平成30年3月30日 制定

令和元年6月21日 改正

理事（教育担当）
教育推進機構長 伊藤 成治

成績評価ガイドラインの目的は、教員が学生の学習成果を適切に評価するためのノウハウを共有することです。

近年、大学には、教育機関としての責務を果たし、卒業生に対して学士号授与にふさわしい学習成果を保証することが求められています。このためには、大学が組織として教育にあたる発想が重要です。弘前大学では、教育推進機構の主導のもとで、大学全体あるいは学部・学科の教育理念を「学位授与の方針」や「教育課程編成・運営の方針」として定めました（平成28年度）。今後は、実際に教壇に立つ教員が、教育理念の実現に向けて授業の到達目標を設定し、教育内容や方法、評価のあり方に創意工夫をこらすことが求められています。成績評価について言えば、弘前大学全体として、どのような枠組みで学生の学習成果を評価していくのか、足並みをそろえていく必要があります。

このような観点から、本ガイドラインでは成績評価を取り上げます。以下、弘前大学における成績評価の基本事項（1節）、成績評価の基本的な方法論（2節）について整理します。

1. 弘前大学における成績評価の基本事項

（1）成績評価の目的

成績評価とは、授業の学習成果を明らかにし、学生が自分自身を客観的に省みるよう促したり、学生の学習成果の質を保証したりすることです。

Point.1 「授業の学習成果」

成績評価は、授業の到達目標の達成度を判定するものです。授業で取り扱っていない事柄を評価することは、成績評価の公正性を損ねます。

Point.2 「学生の客観的な省察」

成績評価では、教員の責任において、学生の学習成果を適切に評価してください。これによって、学生は自らの学習成果を省みるための立脚点を、自分の外に持つことができます。懲罰目的で厳しく評価したり、学生におもねって甘く評価したりすることは望ましくありません。

Point.3 「学習成果の質の保証」

成績評価の結果は、学生の学習成果が一定の水準を超えていること（あるいは超えていないこと）を担保するものでなければなりません。大学が社会に対してアカウンタビリティを果たすためにも、適切な成績評価は重要です。

補足：評価のタイプ

一般的に、評価の目的は診断的評価、形成的評価、総括的評価の3つに整理できます。診断的評価とは、教育活動を始める前に、学生の学力や個性を把握するために行う評価です。英語教育におけるクラス分けテストなどがこれに該当します。形成的評価は教育活動の途中で、学習の進捗や過程を点検し、問題点や改善点を明らかにするために行われます。コメントペーパーなどが該当します。総括的評価とは、一定の教育活動が完了した際に、学習成果を客観的に検証し、教育活動のアカウンタビリティを検証するために行われます。成績判定のために行うテストやレポート、プレゼンテーションはこれに該当します。

成績評価は総括的評価です。そのため、評価の客観性が重要です。本ガイドラインを参考に、客観的な評価を心がけましょう。また、総括的評価（成績評価）とは別に、形成的評価の一環として、平常評価や中間評価を実施することも推奨されます。複合的な評価を実施することで、学生が自らの学習状況を知る機会が増えます。また、教員が、学生をあえて厳しく叱咤激励したり、伸び悩んでいる学生を寄り添い支える配慮を行う機会にもなります。

(2) 出席についての規定

弘前大学では、出席が全体の授業回数の3分の2に満たない者には、不可の評価を与えることになっています。授業では毎回出席を確認するようにしてください。

(3) 5段階による絶対評価

弘前大学では、全学的なカリキュラムチェックの実施により、開講される授業科目がカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに沿った到達目標であるかを確認しており、各授業科目は、この到達目標に達成しているかどうかによって成績判定を行います。合格点

の範囲内で得点分布の調整を行う必要はありません。到達度は、秀・優・良・可・不可の5段階で判定してください。5段階の尺度は、以下のような尺度構成となっています。

評 価	評 点	成績評価基準
秀	：(100点～90点)	到達目標を達成し、特に優秀な成績を修めている。
優	：(89点～80点)	到達目標を達成し、優秀な成績を修めている。
良	：(79点～70点)	到達目標を達成し、良好な成績を修めている。
可	：(69点～60点)	到達目標を最低限達成している。
不可	：(59点～0点)	到達目標に達していない。

なお授業には大学教育としてふさわしい学術性や実践性が求められるため、到達目標にも相応のレベルが求められます。授業を受けた学生が「秀」や「不可」に偏るような場合、当該授業のレベルが妥当ではない可能性があります。その場合には授業のレベルの見直しを行ってください。

(4) GPA 制度 (Grade Point Average)

GPAはグレード・ポイント・アベレージの略です。グレード・ポイントとは、授業科目ごとの段落評価(例えば秀・優・良・可・不可)を4・3・2・1・0のような点数に置き換えたものです。

日本の大学の卒業要件は取得単位数だけであり、成績は関係なく卒業できるため、学生の学習への取り組みが外部から判断しづらいという問題があります。GPA制度では、不可も0点として成績に加算されるため、学生の学習への取り組みが明確化されます。

弘前大学では、当該学期の学修の状況及び成果を示す指標としての学期GPA(履修放棄科目含む)と在学中における全期間の学修の状況及び成果を示す指標としての累積GPAの2種類があり、前者は学生指導等に、後者は学生の推薦や就職活動等に活用しています。

なお、学生が履修した授業科目のグレード・ポイントは、下表のとおり定めています。

評 語	評 点	合否種別	GP
秀	100点～90点	合 格	4
優	89点～80点		3
良	79点～70点		2
可	69点～60点		1
不可	59点～0点	不合格	0

(各GPAの算出方法については、弘前大学GPAに関する要項を参照)

(5) 成績判定資料の開示・保管・学生からの申し立て

成績評価のプロセスで作成する、テストやレポート、プレゼンテーションの採点結果については学生の学びを深化させるために、適宜、学生に開示し、解説やまとめ、模範解答等を提示してください。

なお、成績判定資料は『国立大学法人弘前大学法人文書管理規程』に基づき、5年間、適切に管理してください。

また、弘前大学は「授業科目の履修成績に対する異議申立てに関わるガイドライン」を定めています。異議について検討するための根拠資料ともなるため、成績判定資料は必ず適切に保管するようにしてください。

(6) テスト不正の防止・課題提出のトラブルの予防

成績評価のためのテストの際に、学生がカンニング等の不正を行うことがあります。不正が明らかになったら、弘前大学が定める「試験実施における不正行為の取扱いに関わるガイドライン」に従って厳正な処置を行わなければなりません。

大学はあくまでも教育機関です。不正が生じてから厳正な処置を行うよりも、不正を行わないようあらかじめ指導することを重視しましょう。学生一人ひとりに声をかけるなどして、学生の「授業で個人として扱われている」という自覚を育てることが重要とされています。また、試験の開始前に、不正行為についての大学および教員の考えを改めて説明することも、不正予防につながるでしょう。

レポート等の課題提出をめぐるトラブルに対してもしっかりとした予防が望まれます。レポートについては、締め切りの超過や提出ミス、さらには剽窃（コピーアンドペースト）といったトラブルがつきものです。テストと同様、課題提出のあり方についての大学および教員の考えをしっかりと学生に説明するよう心がけてください。

(7) 個人指導を中心とする科目の成績評価

個人指導中心の科目については、成績評価を複数の教員で行う等、評価の客観性を担保する措置をとることとしてください。

2. 成績評価の基本的な方法論

(1) 評価の正当性

成績評価は教員の好みや思いで決められるものではありません。誰しものが納得するような、正当性のある評価を目指していかなければなりません。

成績評価の正当化のためには、①学生が納得できる評価基準を定めること（基準の公共性）、②評価基準に基づいて、偏りが生じない公平な方法で学生の実態を測定すること（測定の信頼性）が重要です。この2つの条件をクリアすることで、学生をはじめとした様々な立場の者が納得できるような成績評価が実現します。

もちろん完璧に正当な評価を実現することは極めて難しいことです。しかし、大学教員には、正当な評価の実現を目指す責務があります。このような観点から、本節では成績評価の基本的な方法論について整理し、正当な成績評価に向けたポイントを明確にします。

（2） 評価基準の設定

①到達目標＝評価基準の根拠の明示

先述した通り、成績評価は、授業の到達目標の達成度を判定するものです。そのため公正な評価基準を設定するためには公正な到達目標を定めなければなりません。そしてそのためには、到達目標の根拠を明示することが重要です。

例えば「この授業の到達目標は・・・である」とシラバスやガイダンスで一方向的に周知するだけでは、学生はその到達目標の意義を判断できません。一方で「この授業の到達目標は・・・である。この到達目標は・・・学の入門的な水準として設定されており、高年次の・・・という授業と関連している。最終的には・・・という学術領域を学ぶために必要な力が身につく」等、大学の教育課程全体の中で、到達目標がどのような位置付けにあるのか説明を受ければ、学生自身が到達目標の意義をしっかりと理解できます。

到達目標についてしっかりと説明することが、公正な成績評価の第一歩です。このことは成績評価の細かい技術的な問題に腐心するよりも重要なことです。

②組織的な教育目標との対応-学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針との関連づけ-

弘前大学では、卒業生が身につけるべき学術的・専門職的な知識や技能、態度を「学位授与の方針」に明示しています。また、そのために必要な教育課程のあり方について「教育課程編成・実施の方針」に記してあります。

学位授与の方針

弘前大学は、変化が激しく、将来予測が困難な時代にあってこそ力を発揮できる主体的・能動的な探究者を育み、高い倫理観をもって知的探究に取り組むための三つの力を身につけた者に対して学位を授与します。

- 学際的な教養と高度な専門性を身につけ、学術的観点から自然や社会を見通す力

- 学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力
- 常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力

教育課程編成・実施の方針

弘前大学は、学生の主体的・能動的な知的探究を通して、学生の知性ならびに人間性・社会性を育む教育課程を編成・実施します。

◇教養教育◇

見通す力

学生に人類の叡智たる諸学問の構造を俯瞰する機会を提供することで、複眼的思考および多面的価値観に立脚した省察を促します。これにより、国際社会や地域社会が抱える複雑な問題の本質を見通す力を養います。

解決していく力

学生に国際社会や地域社会の実情や問題の複雑さに触れる機会を提供します。これにより、学生が個人およびチームとして問題の解決に挑戦できるよう導いていきます。

◇専門教育◇

見通す力

学生に専門知識を体系的に教授することで、自然や社会への洞察を深化させます。

解決していく力

学生に、専門知識を国際社会や地域社会の問題解決に応用したり、高度な学識を活かして学術的問題の解決に取り組んだりする機会を提供します。これに加えて専門家としての見識と職業倫理も、実践を通して培います。

◇学士課程教育全体◇

学び続ける力

卒業後、学生が国際社会や地域社会の一員として充実した生活を送るとともに、より良い社会の実現に貢献していくことができるように、学生の探究の習慣を確立します。

こうした「学位授与の方針」や「教育課程編成・実施の方針」に即して到達目標・成績評価基準を定めることで、到達目標・成績評価基準の組織的な基盤が構築され、公共性が

担保されます。

とはいえ、明確な対応関係を構築することは難しいです。「この授業の到達目標は、弘前大学の定める『見通す力』に該当するものである」といった緩やかなつながりを示す程度でも、公正な成績評価のための十分な意義があるでしょう。

③到達目標・評価基準の具体化-ルーブリックの作成-

どれほど正当な到達目標・評価基準であっても、それが学生にとって理解不能なものでは納得の余地はありません。到達目標・評価基準のわかりやすさは、成績評価の正当性に密接に関わっています。

到達目標・評価基準をわかりやすくまとめたものはルーブリックと呼ばれます。ルーブリックは表です。縦軸に、到達目標・評価基準が配置されています。横軸は目標・基準ごとの尺度に分けられています。そしてそれぞれのコラムの中に、「この基準のこの尺度は、・・・である」というふうに具体像が書き込まれています。これを見れば、この授業で達成すべき到達点はどのようなものなのか、明確に知ることができます。

達成目標	評価対象	評 点				
		4	3	2	1	0
① 学部横断チームの一員として自分の役割を認識し行動できること	① チームに貢献する行動	自分の役割と個性を認識し、強みを活かして積極的に行動できる	チームの中で自分の役割を認識し、行動できる	チームの中で自分の役割を認識し、行動しようとしてとめている	チームの中で自分の役割を認識したり、行動することがほとんどできない	チームの一員として行動する意思が見られない
② 学部横断チームの一員として他者の役割を判断し適切に働きかけることができること	② メンバーへの働きかけ	メンバーの強みや弱みを把握し、チームのパフォーマンスを最大化するような体制を構築・運用できる	効果的な役割分担についての提案やメンバーのパフォーマンスを高める働きかけができる	役割分担の検討やメンバーへのサポートに つとめている	役割分担の検討やメンバーへのサポートがほとんどできない	他のメンバーに働きかける意思が見られない
③ 地域の問題に関する資料(情報)の検索・収集・整理ができること	③-1 検索・収集	問題設定・解決策提案のために必須の情報に加えて、関連情報も豊富に集めることができる	問題設定・解決策提案に必要な情報を集めることができる	問題設定・解決策提案に必要な情報の収集に つとめている	問題設定・解決策提案に必要な情報をほとんど集めることができない	問題設定・解決策提案に必要な情報を集めようとしていない
	③-2 理解・整理	情報を多角的に検討し、適切に理解・整理できる	情報について検討し、理解・整理できる	情報を理解し、整理しようとしてとめている	情報をほとんど理解・整理できない	情報を理解・整理しようとしていない

図：地域学ゼミナールのルーブリック（抜粋）

到達目標・成績評価基準をわかりやすく説明する手法の一つとして、ルーブリックは有効です。学生のみならず、教員自身にとっても、どのような観点から成績を評価するのか、

見通しがはっきりします。(ちなみにルーブリックは「赤線を引いた箇所」(rubrika)、転じて「大事な部分」という意味です。)

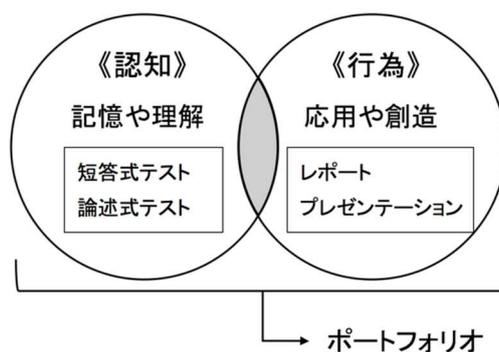
補足：目標に準拠した評価・目標から自由な評価

基本的に、成績評価は到達目標を準拠して行うものです。しかし、授業というものは、必ずしも教員の思った通りにはいかないものです。例えば、授業を進めていく中で重要な目標が隠されていたことに気づいたり、明らかに到達目標とは関係がないが、非常に優れたパフォーマンスを示す学生が存在したりすることもあるでしょう。そのような時には、目標から自由な評価(goal free evaluation)を行わざるを得ません。

目標から自由な評価は、目標に準拠した評価と比べて、正当性の根拠が希薄です。そのため学生にとっては納得しがたい評価結果になる危険をはらんでいます。どうしても目標から自由な評価を行う時には、このような特徴を踏まえて、なぜ到達目標とは違う観点から評価を行うのか、そしてどのような観点から評価を行うのか、学生にしっかりと説明し、理解を醸成することが重要です。

(3) 様々な測定方法

到達目標・評価基準を明確化したのちに、いかにして学習成果を明らかにするのか、その測定方法を定める必要があります。授業の焦点が、学生の認知と行為のどちらに置かれているかによって、適切な測定方法が異なります。



図：様々な測定方法

認知に焦点をおいた授業とは事実や概念、方法などについて講義を通して学ぶような授業です。こうした講義形式の授業では、知識の記憶(知識を言語化して認識し、自由に想起することができる)や理解(自分自身の認識枠組みの中で知識を解釈し、自分の言葉に

言語化できる)の程度を測定することが重要です。具体的には短答式テストや論述式テストといった方法があります。

行為に焦点をおいた授業は、いわゆるアクティブラーニングです。学生自身が知識を活用していく演習形式の授業はこちらに該当します。演習では、知識の応用(知識を別の文脈や場面において活用できる)や創造(事実や概念、方法を組み合わせて新しい知識をつくりだせる)の程度を測定することが重要です。具体的には、レポートやプレゼンテーションといった方法があります。

また、実験や実習のような形で、学生の認知と行為の双方に重点を置いた授業もあり得ます。このような場合には、テストやレポート、プレゼンテーションのハンドアウトなど、様々な資料を総合的に記録していくポートフォリオが有効です。

補足：成績評価の硬直化への注意

近年、日本の大学教育では成績評価の厳格化が求められています。その中で「学習は記憶→理解→応用→創造と低次思考から高次志向へと連続的・階層的に展開していく。教育課程の体型や授業の展開も同構造で展開するべきである。評価はそれぞれの要素ごとに厳密に測定するべきである。」などという硬直的な考え方が流布しつつあります。

しかし、このような考え方は避けるべきです。実際の学習の過程は複雑です。知識の応用に取り組む中で知識の理解が深まることもあります。また、一つの知識をしっかりと理解するということがそんなに簡単なことではありません。知識の応用や創造よりも難しいこともあります。工夫次第ではありますが、論述式テストで知識の応用や創造を測定することも、同様にレポートやプレゼンテーションで知識の記憶や理解を問うこともできます。

大学の授業には様々な可能性があります。大学での教育や学習を一面的に捉えたり、成績評価の方法を硬直的に捉えたりすることは、大学教育の足かせにしかありません。

① 短答式テスト・論述式テスト

まず「成績評価のテストは授業の到達目標の達成度を判定するために行われるものであること」を認識しなければなりません。授業で取り扱っていない事柄を出題したり、一部の学生をふるい落とすために過度な難問を出題する必要はありません。

出題形式は短答式と論述式に整理できます。短答式テストは問と答が一对一で対応しているテストです。論述式テストは、問に対する答を学生自身の言葉で提示するよう求めるテストです。

短答式テストと論述式テストは、授業の目標や内容、方法に合わせて短答式テストと論述式テストを使い分けましょう。知識の記憶を測定するときには短答式テストを、知識の

理解や応用を測定するときには論述式テストを採用します。

テストとしての信頼性は、概して、短答式テストの方が論述式テストよりも高くなります。論述で用いるキーワードを指定したり、回答の論理性をチェックするためのチェックリストを作成するなど、論述式テストの採点には工夫が必要です。ルーブリックを活用することでも、信頼性を向上させることができます。

② レポート・プレゼンテーション

レポートは、学生に特定のテーマについての知見を文書の形で取りまとめ、報告させることで、学生に知識の応用や創造を求めるものです。プレゼンテーションもまた特定のテーマについての知見を取りまとめるように求めるものですが、報告の形式が口頭発表となります。

レポートとプレゼンテーションの最大の違いは、両者に求められるコミュニケーションの差です。レポートでは書く力が求められ、プレゼンテーションでは話す力が求められます。授業で取り上げる学問分野や専門職において、重要なコミュニケーション・スキルは何か、あるいは、弘大生はどのようなコミュニケーション・スキルに課題を抱えているか等を検討し、適切な測定方法を選びましょう。

なお、レポートやプレゼンテーションの正解は多様であり得るため、採点結果にはばらつきが生じます。信頼性を高めるためには、ルーブリックを作成し、報告の内容や方法さらには報告の形式などについて、どのような基準でどのように評価するのか明示することが推奨されます。

③ ポートフォリオ

ポートフォリオは「作品集」の意味です。大学教育の文脈では、学習の過程で作成したノートやレジュメ、実習記録、テスト結果、学習の成果物として作成したプレゼンテーション資料、作品の記録がポートフォリオです。これを電子化したものについては、eポートフォリオと呼ばれます。

ポートフォリオは、複合的な活動が求められる実習においてよく採用される測定方法です。日報や週報、リフレクションシートなどをポートフォリオにまとめていきます。

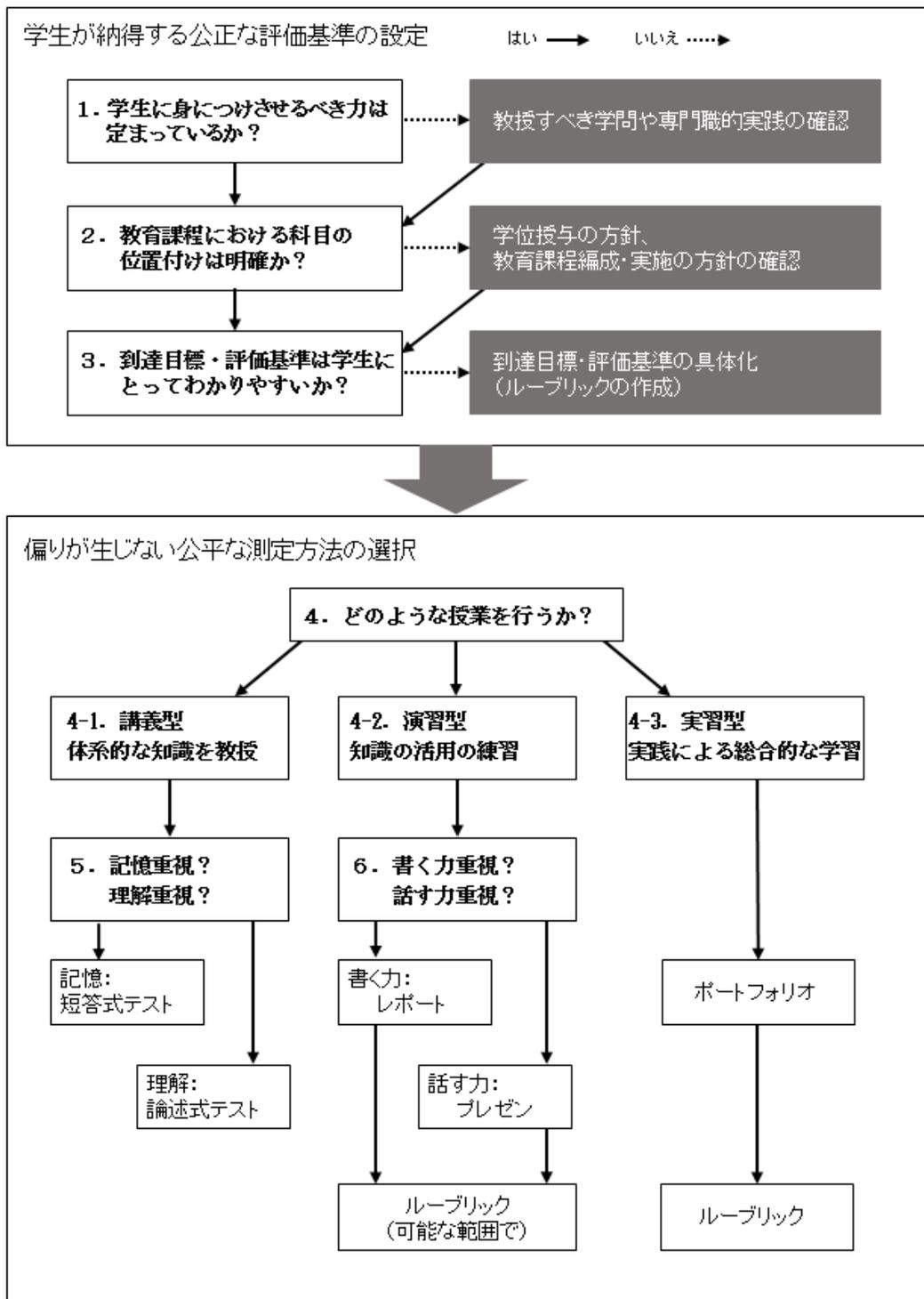
英語教育や多言語教育、キャリア教育など、複数の科目を数年に渡って履修していく場合も、ポートフォリオは有効です。例えば英語でのライティングペーパーを全て一つのポートフォリオにまとめておけば、1年次と2年次を比較した時の学生の成長を明らかにすることができます。

ポートフォリオはあくまで記録の集積なので、それだけでは成績評価には使えません。

一般的にはルーブリックと組み合わせることで、成績評価に活用します。ポートフォリオにまとめられた長期にわたる活動記録の集積から様々な学習成果を読み解くために、ルーブリックが重要な手がかりとなります。

(4) 成績評価のためのフローチャート

ここまでに取り上げた成績評価の論点は、次のように整理できます。授業における最適な成績評価のあり方を検討する際にお使いください。



図：成績評価のためのフローチャート

《「成績評価ガイドライン」に関する問い合わせ先》弘前大学教育推進機構 教育戦略室